

日本YMCA同盟

THE
YMCA

The Young Men's Christian Association News



No.840 2024

2024年10月1日発行（毎月1日発行）
1947年10月27日 第三種郵便物認可
本体価格45円（外税）（送料63円）
発行／公益財団法人 日本YMCA同盟
〒160-0003 東京都新宿区四谷本塩町2番11号
Tel 03-5367-6640 Fax 03-5367-6641
URL : <https://www.ymcajapan.org/>
発行人／田口 努 編集人／横山 由利亜



「第1回アジア・太平洋クリスチャンユースアッセンブリー」2024年9月 @韓国・濟州島

OPINION

YMCAにおける国際プログラムの軌跡 —背後にある歴史的責任—

日本YMCA同盟会長、アジア・太平洋YMCA同盟理事 山本 俊正

日本に最初のYMCAが創立されたのは1880年、東京YMCAでした。その後6年の間に、大阪、横浜、神戸にYMCAが設立されます。1897年に日本学生YMCA同盟が設立され、1903年には学生YMCAと都市YMCA両同盟が合体し、現在の日本YMCA同盟が結成されています。設立後の各YMCAは、北米YMCAからの主事派遣とともに建築募金を受けるなど大きな力添えを受けました。また、1913年には朝鮮YMCA連合会が、日本の植民地統治下、日本YMCA同盟に併合されることを条件に結成されました。韓国YMCA全国連盟は今年、創立110年を迎え9月に記念式典を行っています。この間、当時の明治政府は「大日本帝国憲法」を公布（1889年）し、翌年、「教育勅語」（1890年）を發布します。日清戦争（1894-1895年）、日露戦争（1904-1905年）を経て、日本は、柳条湖事件（1931年）、盧溝橋事件（1937年）を起点として、第二次世界大戦に突き進んで行きました。この時代、YMCAの国際プログラムは日本の戦争と大きく関係をしていました。とりわけ、日露戦争の時から第二次世界大戦まで、日本のYMCAが海外で行ったプログラムの代表的なものが、「軍隊慰労事業」でした。「皇軍慰問」活動とも呼ばれました。英語では、“War Work”と呼称され注目されました。初期の段階では北米YMCA同盟もこの事業のために、多額の寄付金を集め、協力しました。また事業内容の中心は慰問使を戦地に送ることでした。韓国、満州（現中国北東部）の11カ所にテントを設営し、慰問部を設けて、兵士の入浴、洗面、衣服の洗濯場、理髪所をつくりました。そのほか、音楽、幻灯、講談、映画による慰問、説教、宗教講話による伝道などもしたようです。また、中国における医療支援活動も行っています。



戦後日本のYMCAは、1955年の世界YMCA大会（パリ大会）に参加し、国際協力活動を開始します。1960年代前半には海外諸組織への主事派遣を実現しています。1965年にアジアで初めて開催された、東山荘での世界同盟第4回総会では、国際協力に対する日本のYMCAの姿勢を一層積極的なものにしました。日本YMCA同盟は世界同盟総会終了後、同年10月に国際事業協議会を開催して方針を定め、国際協力・奉仕募金により、分かち合いを具体化することを決定しています。現在の国際協力募金の出発点です。ここで特筆すべきは、この時点で国際協力プログラムの関心がアジア・太平洋地域に向けられたことです。1969年に開催された第5回世界同盟総会では、世界YMCAの国際協力の具体的計画として、アフリカ、アジア、中南米に広がる難民の救済を優先課題とすることが決議されます。1970年を「世界YMCA難民の年」と決めました。総会后、日本YMCA同盟はベトナムにおける難民事業とサイゴンYMCAへの協力のためにスタッフを派遣することを決定しています。戦後25年にして日本のYMCAは国際的に「受けるYMCA」から「与えるYMCA」に姿勢を変えたのです。世界運動に連帯してアジアを中心とした国際協力に歩み出したのでした。

現在、YMCAの国際プログラムは多種、多様な領域でYMCAのビジョンとミッションにチャレンジをしています。一つ一つのプログラムに大切な意味が込められています。日本のアジアに対する戦後の歴史的責任もその一つです。日本YMCA基本原則の（第3文）には、「私たちは、アジア・太平洋地域の人びとへの歴史的責任を認識しつつ、世界の人びとと共に平和の実現に努めます。」と書かれています。

山本 俊正 Yamamoto Toshimasa

1977年～1985年まで東京YMCA主事として勤めた後、米国パークレー太平洋神学校に留学。米国合同メソジスト教会牧師となる。関西学院大学教授・宗教総主事、日本キリスト教協議会（NCC）総幹事等を歴任。現在は学校法人アジア学院理事長ほか、大阪YMCA理事、日本YMCA同盟会長、アジア・太平洋YMCA同盟（APAY）の理事も務める。

●全国のYMCAのさまざまな活動はこちらからもご覧いただけます。 <https://www.ymcajapan.org/>

YMCAの国際交流・国際協力

現在YMCAは世界120の国と地域にあり、その国際的なネットワークを活かしてさまざまな国際協力・交流活動を行っています。

キャンプやスポーツを通じた国際交流や、貧困など社会課題をテーマにしたワークキャンプ、各国の学生やスタッフが集う研修や会議、国内における留学生や外国ルーツの子どもの支援活動など、その種類は多岐にわたります。また大規模な災害や紛争が発生した際には、世界中のYMCAで募金活動やスタッフ派遣を行うなどして、現地YMCAが取り組む支援活動をサポートしています。時には国児や小学生にも海外の出来事を伝え、共に街頭に立って募金を呼びかけることもあります。こうした多種多様な国際プログラムを通して世界の課題を学び、支え合い、各地の仲間と出会うことで、広くグローバルな視点で考えることのできる青少年の育成に努めています。

2020年以降のコロナ禍で、しばらく国際プログラムの中止が相次ぎましたが、徐々に再開していますのでご紹介します。機会があればぜひご参加ください。

私たちがめざすもの

私たちは、一人ひとりのいのちと

その多様性を大切にす平和文化の創造をめざします。

そのために、コース・エンパワメントを進めながら、地球市民を育て、人と人のつながりを強めていきます。

「多様性を受け入れグローバルな視点を持つためのスタンダード」
(2020年1月)より



ベトナムボランティアワークの旅 | 北海道YMCA

学校の教室が不足している農村部に、教室建設資金を支援しているほか、現地を訪れ、共にペンキ塗りなど教室建設のためのワークキャンプを行っています。



フィリピンワークキャンプ | 埼玉YMCA

フィリピン・パンガシナンYMCAと長年にわたり実施している2週間のワークキャンプ。現地のコースと共同生活をしながら、トイレや給水ポンプの設置、食糧支給や小学校でのレクリエーション等に取り組みます。



グローバルインターンシップ | 大阪YMCA

アジアから欧米まで各国のコースが大阪YMCAでインターンシップを行っています。保育園でのアシスタントからイベント運営など、携わる業務はさまざま。これまで約30カ国から500人が参加しました。



台日こどもキャンプ | YMCAせとうち

2018年の西日本豪雨災害で被災した児童のリフレッシュを目的に、台湾の彰化YMCAはじめキリスト教会などが協働で実施したキャンプ。その後も交流が続き、今年で3回目となりました。



日韓YMCAコースセミナー | 名古屋YMCA

日韓国交正常化前の1963年に韓国YMCAが、「過去の問題や偏見にとらわれずに、新しい友好の絆を築きたい」と日本の青年たちを招待したことからはじまった交流。毎年交互に名古屋とソウルを行き来しています。



ICEP (International Campers Exchange Program) | とちぎYMCA

アメリカYMCAの中高生が夏休みに1カ月間、とちぎYMCAでボランティアを体験。キャンプの引率や保育アシスタント、老人ホーム訪問などを通して交流を深めました。

アジアの社会課題に向き合う | 横浜YMCA

「グローバル・スタディーツアー in タイ」

横浜YMCAは1994年からバンコクYMCAバヤオセンターと協働で、児童保護プロジェクト「プロテクト・ア・チャイルド」を実施しています。ここでは、貧困等により人身売買のリスクがある児童が共同生活をしながら、自立した生活ができるよう教育を受けています。



横浜YMCAは2019年度まで継続してボランティアツアーを開催してきましたが、コロナ禍でしばらく実施できず、昨年度5年ぶりに「スタディーツアー」として再開。今夏には高校生から社会人まで11人が参加しました。

ツアーでは、バヤオセンターの子どもの交流のほか、山岳少数民族の村でのホームステイや日本への出稼きから帰国した女性からも話を聞き、人身売買問題の背景についても考えます。

また今年は、環境問題に積極的に取り組んでいるチェンマイYMCAにも足を運びました。人身売買と環境問題は一見すると関係ないように思われますが、いずれもグローバルな社会課題であり、解決のためのアプローチにも共通点があります。ツアーでは体験的な学びを通して参加者同士で話し合い、より良い社会をつくるために何をすべきかを考えることを大切にしています。多様な出会いと学びから、一人ひとりの心に平和の種が蒔かれ、やがて大きく育ち、豊かな実を結ぶことを願っています。

横浜YMCA 柳原 絵里子

“Let's Get Together” | 広島YMCA

「ノーモア・ヒロシマ」と「リメンバー・パールハーバー」

1941年の真珠湾攻撃。1945年の原爆投下。その悲劇を乗り越えて平和の道を歩もうと1959年、広島市とホノルル市が姉妹都市を提携。それを機に、広島YMCAとホノルルYMCAは交流を開始し、1961年に広島から交流使節団を派遣。翌年にはホノルル側が来日し、国際交流プログラム“Let's Get Together”が誕生しました。以来毎夏、交互に行き来を続けています。



2020年からはコロナ禍で一時中止となりましたが、昨年度から再開。今年は広島から5年ぶりにホノルルを訪れ、現地の中高生とのキャンプやホームステイを通して親交を深めました。初めて海外に行く学生も多く、片言の英語とスマホの翻訳機能を使って会話し、ソーラン節やフラダンスを教え合うなど、たくさんの驚きや発見を楽しみながら友情を育んでいきました。

私自身、高校時代にこのプログラムに参加し、その後YMCA職員となって今年、引率をしたのですが、驚いたことにホノルル側でもかつての参加者たちがホストファミリーなどとして関わり、世代を超えてこのプログラムを大切にしています。悲劇を繰り返さないようにと願うみんなの気持ちが、これからも受け継がれていくように。今回の参加者たちにも、この友情を一生の宝物にしてほしいと心から願っています。

広島YMCA 牧野 円香

多文化共生社会を目指す | 東京YMCA

「外国にルーツのある子どものサマーキャンプ」

近年、親の就労や国際結婚などさまざまな事情によって海外から日本に移住してくる子どもが増えています。しかし中には、「日本語の壁」や教育システムなど「制度の壁」、文化の違いによる「心の壁」を抱えながら厳しい生活に直面している子どももいます。

東京YMCAでは昨年度から、こうした子どもたちの居場所プログラムを始めるとともに、同じ境遇の子ども同士の交流等を目的にキャンプを実施しています。今年も8月に3日間、東京YMCA山中湖センターで開催し、ウクライナ避難者をはじめ中国やモンゴル、ネパールなどさまざまなルーツの子どもたち30人が参加。カヌーやクラフト、クライミング、アーチェリーなどを楽しみました。

キャンプ中は日本の習慣に合わせるのではなく、それぞれの文化を理解し合い、宗教食や個室シャワーの提供、言語サポートなど対応を工夫し、「誰もがありのままにいられる心地よい居場所」を作り上げていきました。全員で助け合って築いたこのキャンプコミュニティは温かで、まさに多文化共生社会だったと思います。みんなで覚えた『世界中の子どもたちが』の歌声が重なった瞬間は感動的でした。このような居場所で楽しい経験を重ねることで、将来に夢や希望をもって成長できるよう今後も活動を展開していきます。



東京YMCA 江尻 明子

その他の国際交流・国際協力プログラム

*各YMCAは下記一覧以外にも、さまざまな国とパートナーシップを結んで交流や支援活動を行っています。詳細はホームページで。

▶ <https://www.ymcajapan.org/society/international/>

日中韓YMCA平和フォーラム	全国	18歳以上
3カ国のコースが共に歴史を学び、交流を深め、平和に向けたディスカッションなどを行う		2年おき(4日間)
ICCPJ (International Camp Counselor Program)	全国	台湾学生
台湾で日本語を学ぶ学生たちが夏に1カ月間、日本のYMCAキャンプ場でボランティアをしながら交流する		7月～8月
 Bangladesh YMCA スタディーツアー	東京YMCA	高校生以上
現地YMCAが運営する「働く子どもたちの学校」や職業訓練センター等の見学ほか交流、ホームステイなど *2023年は中止		不定期(約2週間)
東京-NYフロストバレーパートナーシップ	東京YMCA	学生、一般
NY在住の日系の子どもたち対象のキャンプに、日本からキャンプカウンセラーを派遣		6月～8月
International Youth Peace Seminar	広島YMCA	高校生～20代
国内外の若者たちが、平和記念公園の見学などを共にし、平和について考えながら交流する		8月6日前後5日間
日韓青少年交流プログラム	熊本YMCA	高校生以上
熊本県立盲学校と韓国大邱光明学校の生徒をYMCAコース等がサポートし、音楽やスポーツで交流するプログラム		8月
日韓学生YMCA交流プログラム	学生YMCA	大学生
日本と韓国の学生YMCAが定期的に訪問しあい、歴史問題や社会課題などにフォーカスして学び、考え、理解し合うプログラム		2月頃(2年おき)
インドスタディキャンプ	学生YMCA	大学生
現地のYMCAやNGOとともに、インドの貧困地域や児童養護施設などを訪問。その課題を学ぶ		1月～2月(約2週間)

キャンプ・スポーツ等による交流

キッズワールドカップ in 韓国	東京/名古屋/大阪	小学生
韓国、中国、シンガポールほかアジア諸国の小学生が、サッカーを通じて交流する		8月(5日間)
台湾高雄・神戸YMCAアクア交流プログラム	神戸YMCA	小1～高3
台湾・高雄YMCAの水泳メンバーが来日し、水泳を通して交流。今年は大阪の水泳競技会にも出場した		8月(4日間)
東アジアユーススポーツフェスティバル	大阪YMCA	小学生
今年は台北、香港、ソウルの小学生が来日。バスケットボールをとおして交流する		8月(5日間)
キャンプ、ホームステイ、語学研修等	東京/埼玉/横浜/和歌山/北九州ほか	小3～高3
行き先は、アメリカ(ハワイ、ボストン、オレゴン、サンフランシスコ、NYなど)ほか、マレーシア、シンガポールなど		7～8月(8～16日間)

外国にルーツのある人びとの支援

モンゴル子どものオルドン	茨城YMCA	小学生以上
在日モンゴルの子どもたちに母国語による学習の場を提供。モンゴルYMCAとも交流プロジェクトを実施		毎週
在留外国人への日本語教育推進事業等	大阪/滋賀/和歌山ほか	子ども～大人
日本語学校のノウハウを活かし、地域行政と連携して、外国人労働者や子どもたちに日本語教育を提供。あわせて日本語教育支援のボランティア養成や、外国人の方へ生活情報の提供なども行っている		—

困難な国・地域にあるYMCAの支援

ウクライナ 軍事侵攻による避難者支援		
ウクライナ国内で活動を続ける現地YMCAの支援、および日本への避難者の支援活動を実施中		
パレスチナ オリーブの木キャンペーン		
紛争で破壊されたオリーブ畑の復興のためYWCAと共に募金活動を実施		
貧困地域等の子どもたちの教育支援/職業訓練		
アジア諸国のYMCAが協働し、ミャンマー、カンボジアのほかモンゴル、東ティモールを支援中		

【能登半島地震】

被災地の子どもたちがリフレッシュキャンプ

8月、輪島市の小学生を招き、「国立立山青少年自然の家(富山県)」を会場に2期にわたってキャンプを行いました。8月9～12日は小学3～6年生、8月18～20日は小学1～4年生を対象に実施したところ、総勢26人が参加。中には



震災後に転校した子どもたちもおり、再会を喜び合う姿も見られました。

運営にあたったのは、滋賀・富山・盛岡・茨城・横浜など全国から集まったボランティアリーダーたち。事前にオンライン研修や打ち合わせを重ね、「子どもたちが、被災したことを忘れ、自然の素晴らしさに出会い、新しい仲間との出逢いを通して、明るい未来を想像できる豊かな期間」をつくりたいと、力を合わせて実施しました。

私が引率した18～20日の「フレンドシップキャンプ」では、森探検やクラフトなどを楽しんだほか、リーダーたちが今回のテーマソングとして選んだキャンプソング『キャンプで会いましょう』をみんなで覚えて何度も歌いました。2日目の夜のキャンドルファイヤーでは、一人一言ずつ発表。キャンプでの発見や将来の夢などが語られた中、「私は自分の家が好きだった」と、倒壊した家について話した子がいました。小さな肩に背負った大きな悲しみ的一端をみんなで共有したひとときでした。帰りには、お互いにサインし合ったクラフトの焼き板をお土産に、「また会おうね」と約束してバスを見送りました。

YMCAはこれからも、被災した子どもたちが夢をもって前向きに生きられるよう、その傷跡に寄り添う取り組みをしていかなければならないと思います。このキャンプを支えてくださった多くの方々に感謝しますとともに、引き続きのご協力をお願いいたします。

能登立山フレンドシップキャンプディレクター／滋賀YMCA 谷村 隼斗

日本宝くじ協会から助成

一般財団法人日本宝くじ協会より助成金の交付を受けて、集会用テント41張、宿泊用テント20張を購入いたしました。

このテントは全国17YMCAのキャンプ場や幼稚園・保育園などに贈られ、野外での青少年育成活動のほか、バザーや運動会などの地域行事、災害時の支援活動などに用いられます。感謝してご報告します。



姫路YMCA 地域子ども会キャンプ

ポジティブネット YMCA国際協力募金

YMCAの国際協力プログラムは皆さまの募金によって行われています。引き続き、ご支援ご協力をお願いします。

- ゆうちょ銀行 振替口座(振替貯金)
00190-6-464236 日本YMCA同盟地域国際募金口
- クレジットカード・銀行振込は
下記サイトから
<https://srv.asp-bridge.net/ymca/index/>



ウクライナ避難者支援

アンケートに見る 多様化する課題と自立への道筋

戦争から2年半が過ぎましたが、収束には程遠い状況です。日本には1991名(8月末日現在)のウクライナ避難者が生活し、その多くが将来に強い不安を抱えながらも、日本での定住を視野に今後の生活を模索しています。

昨年12月の法改正で最大5年間の定住ビザの取得が可能になる反面、来日当初からの経済的支援は順次終了していています。フルタイムで就業をしている避難者は全体の1割程度です。日本YMCA同盟では東京都と共に、ウクライナ避難者にアンケート調査を行ったところ、避難者の就業意欲は高いものの、母親は慣れない地での子育てに必死で自身の日本語習得や就労・キャリア形成は後回しになっていること、中高年以上は持病の悪化、病気の発症などが増え、「人に迷惑をかけたくない」「ウクライナに帰りたい」と家に引きこもっているケースが多いことがわかりました。母親層には、自分のために使える時間を確保し、日本語教育の継続や子育てと両立できる働き方、長期的に見てキャリアを活かせる就業先探しを提唱していきます。また、中高年には、生きがいづくりや、日本の介護制度の紹介など、不安や孤立を回避する手立てが必要です。

最近増えている、10代、20代の単身での避難者は日本語の向上は目覚ましく、強い日本文化への憧れもあり定住に向けて頑張っています。とはいえ日本語の勉強、慣れないアルバイト、将来の進学や就職、ウクライナの家族のことを思い悩む毎日はストレスフルで、メンタルの不調を訴える人も多いのが特徴です。公的支援や相談窓口を頼らない傾向にもあり、将来設計には声かけや見守りが不可欠です。

YMCAではこのように、対面訪問での相談支援活動と、アンケート調査をきめ細やかにしながら、来る3年目の正念場に備え、伴走を続けていきます。

日本YMCA同盟 横山 由利亜

Amazon YMCA サミット2024

児童養護施設の子どもたち19人が参加

神奈川県内の複数の児童養護施設の子どもたち19人を、8月24日～25日、富士山の麓「YMCA東山荘」に招待し、YMCAの大学生メンター、アマゾンジャパンの社員ボランティア、児童養護施設職員や関係者総勢50人で、「Amazon YMCA サミット2024」を行いました。

2019年からアマゾンジャパンと日本YMCA同盟はパートナーシップを結び、児童養護施設の子どもたちにプログラミングなどSTEAM教育を提供し、今回は初めて宿泊を伴い、本格的なミニ四駆制作と走行、バーベキューなどさまざまな体験を楽しみました。多くの大人が見守る安心で安全な環境、そして大自然の中で、子どもたちは普段よりチャレンジ精神旺盛に、制作したミニ四駆を思い切り走らせてみたり、ウォータースライダーに果敢に挑戦したりと、たくさんの夏の思い出を作っていました。Amazonの社員ボランティアも子どもたちに積極的に関わり、今後、ボランティアを更に推進していきます。



同行された児童養護施設の職員からは、「多様な大人の気配りや関わりが、子どもたちの新しい面を引き出していて、成長につながると感じました。普段はできないダイナミックな体験も楽しく、またぜひ参加したいです」との声が寄せられました。

日本YMCA同盟 横山 由利亜